

京都先端科学大学の授業に注目が集まる！

右京区太秦にある京都先端科学大学での工学部の授業が注目を集めている。世界で活躍するエンジニアを養成する目的で、工学部の授業をすべて英語で行っている。他の大学では教養課程や国際関係の学部で英語で授業を行うのは珍しくないが、工学部ですべての授業を英語で行っているのは、国内ではここだけだ。留学生も多く、日本人学生と多くの外国人学生と一緒に学べる国内留学の雰囲気がある。

＜解説＞京都先端科学大学は、日本電産の永守氏が理事長を



務める。2018年に旧京都学園大学の経営に関り、2019年には学校名を変更。これまで300億円近くの私財を投入し、大学の改革に心血を注いできた。少子化の中でこれからの大学に必要になってくるのは、独自性。つまり、差別化、高付加価値化だ。結果的に、社会で活躍できる人材を輩出できることが、大学の存在意義を高める。それなら、卒業して即戦力になる人材を教育することが主眼になるとの考えから、大きく学園の教育方針の改編を行い、今日に至る。以前は、亀岡のキャンパスだけであったのが、右京区太秦の旧浄水場跡地にキャンパスを建設。当初文系の

学部だけだったのを、永守氏が理事長に就任して以来、工学部など理系の学部の創設に力を入れた。近年、初めての卒業生を輩出し、多くの一流製造業に就職する学生が多い。当然、ニデックグループへの就職も多く、一部では日本電産付属大学と揶揄する向きもあるが、一向に気にかけない。そもそも従来の大学運営に疑問を抱いていた同氏だが、それならと自身が私財を投じて教育改革に乗り出した。しかし、民間企業経営と異なり、教育分野で結果が出るには10年、20年と長い年月がかかる。1回生から英語の授業を受けることで、学生の意識



が大きく変化することを期待する。中には英語が不得意な学生もいるが、そこは手厚いフォロー体制を敷いている。担当教員以外にサポートする教員も配置。レベル別のクラス編成や、工学部独自の学習支援室などを設け、学生の勉学意欲を後押しする。同大学では、2025年には経済経営学部、バイオ環境学部にも全ての授業を英語で行うコースを設ける予定だ。果たして、これらの施策がどれくらい大学の付加価値を高め、差別化、独自化に寄与するかは、もう少し先にならないとわからないが、学園挙げてこの取り組みを推進するという方向性だけはぶれないようだ。